

# 吉里吉里地区避難行動調査と犠牲者調査に見る、 生死をわけた行動の分類

高松 洋子<sup>※</sup>

## 1. 要旨

大槌町吉里吉里地区は、2011年3月11日に発生した東日本大震災により壊滅的な被害を受けた。住民約2,500名中98名が犠牲となった。家屋は約1,000軒中、全壊355戸、半壊45戸、一部損壊24戸、被災家屋の居住者は推定1,000名となった。

しかし、これほどの被害を受けながら、再びここで暮らしたいという希望が半数以上に上る。(図16 今後住みたい場所より) なぜこのように強い愛着が生まれるのだろうか。

さらに、2013年度は独自の自主防災計画の策定支援に携わった。ここで安全に暮らすために津波の日の事を振り返り、後世に伝えようというプロジェクトである。

本稿では、自主防災計画の策定支援のために調査した結果を振り返りながら、なぜこれほどの被害を受けながら、犠牲者の数が比較的少なかったのか、その中で犠牲となった方はどのような特徴があるか、助かった方はどのような行動をとったのか、という点について調査した結果を述べる。

## 2. 助かった人の避難行動

2013年2月から実施した吉里吉里地区避難行動調査では、避難の際の行動を10分毎に質問するA調査と、白地図に避難経路を記したB調査を実施し約200名の回答を得た。調査はほぼ対面式で、一部時間のない方について郵送で回答をお願いした。その結果を地理情報システムにて電子化し、1分毎の行動を補完し動画にした。その結果、避難行動を次の4パターンに分類した。A) ストレート避難型、B) 立ち寄り型、C) 動かない型、D) 帰ってきた型である。

## 3. 全体の動き

まず、地図上に示した10分毎の場所を図1～6に示す。図1から順に①地震が発生した時(14時45分)、②10分後、③20分後、④津波が到達したとき(15時15分)、⑤津波が落ち着いたとき(16時～17時) ⑥その日の晩過ごした場所、となっている。

---

<sup>※</sup> たかまつようこ 岩手大学三陸復興推進機構研究員  
takamatu@iwate-u.ac.jp

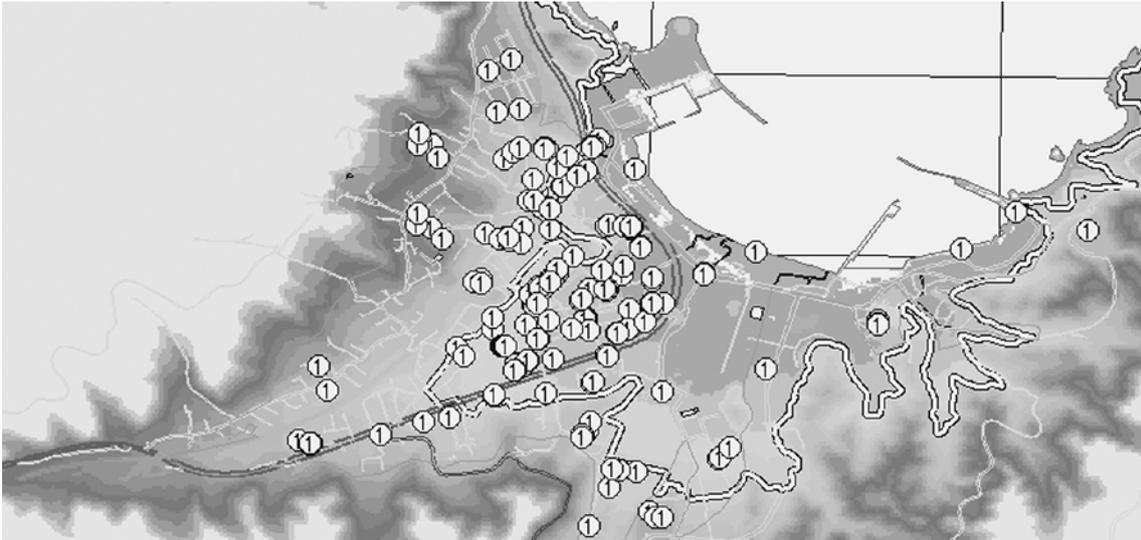


図1 地震発生時

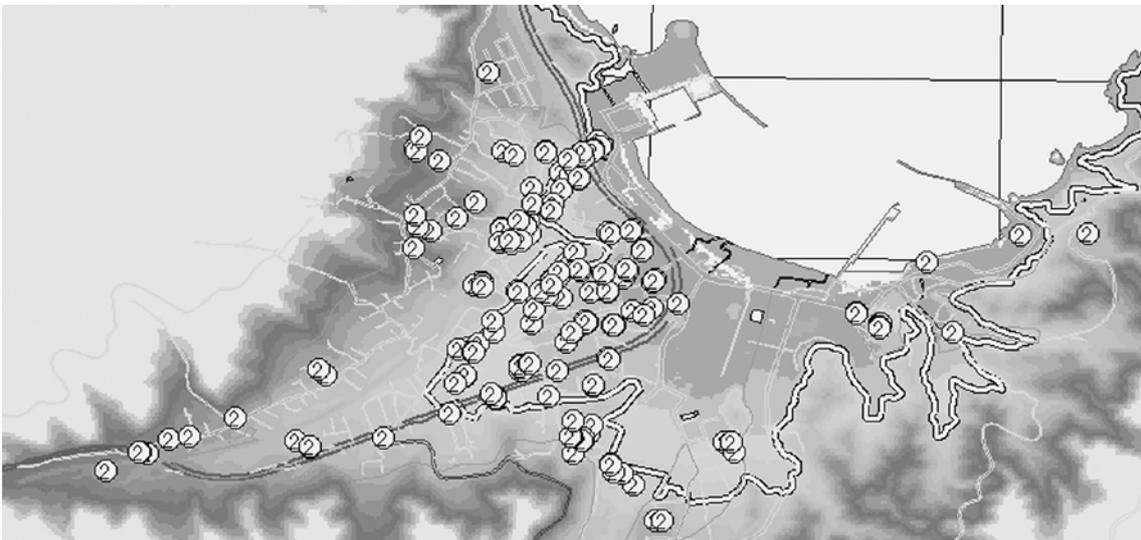


図2 地震から10分後

図1は、地震が発生したときの場所である。避難行動調査の回答によると「お客さんの対応中」「散歩中」「読書」「自宅にて茶飲み」などいつもの金曜日の午後の様子が記されている。

図2、10分後は地震があったことでざわざわしている。「母が高齢のため、避難に時間がかかると思いすぐに準備をして避難した」(30代男性・サラリーマン)「すぐに津波がくると思い、道にでて津波だーっ上がれーっと呼びつづけた」(80代女性・元交通指導員)と、津波の危険を察知して動く人は動き始めている。消防団は水門を閉めるために各担当の水門前に集合している。

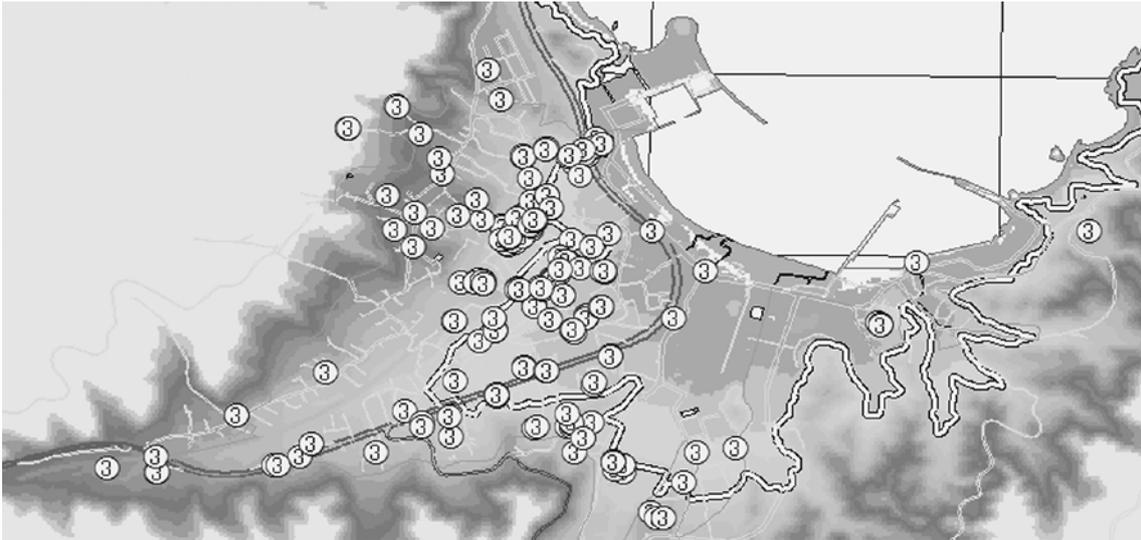


図3 地震から20分後

図3は20分後。小学校、中学校、保育所、お寺など高台に人が集まってくる。低い所の保育園など、避難しようという人はだいたい避難が完了している。この時点では大津波警報は3mの予報である。(15時15分に6mに変更)吉里吉里地区の防潮堤の高さは震災前で5mあったので、この時点で安全と考えて誰も避難しない可能性もあった。正確な情報がない中での30分でおよそ80%の人が避難できたのは何故だろうか。

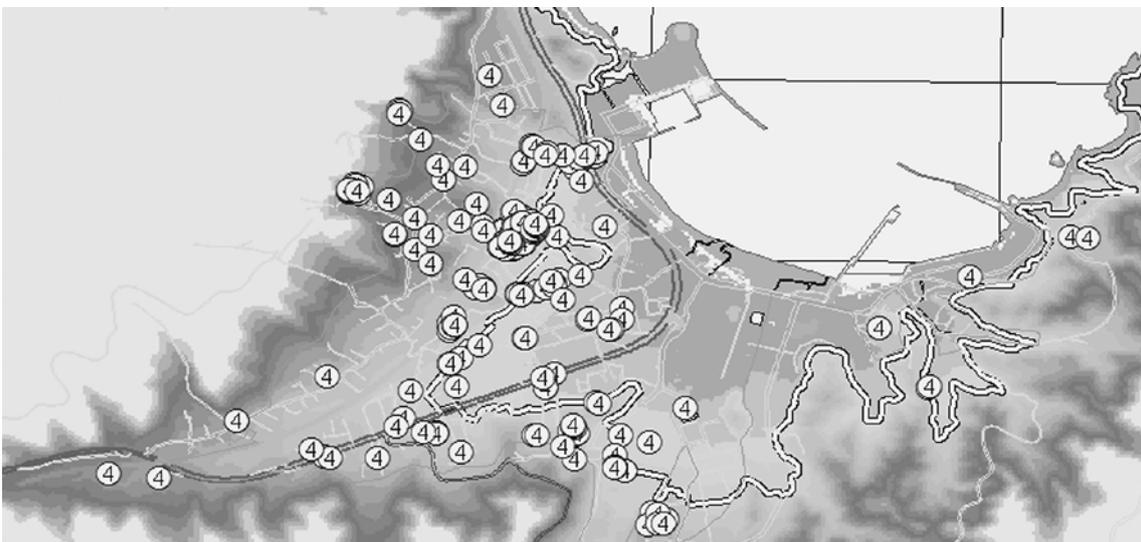


図4 津波が来たとき

図4、津波が来た時刻は吉里吉里地区ではちょうど地震から30分後、15時15分であった。津波がきた時刻に浸水域にいたと答えた人がまだいる。この人たちは間一髪で助かった人たちである。「津波が目の前に迫り、軽トラに飛びのりアクセル全開で階段を登った」(60代男性・自営業)「裏山の道のないところをよじ登った」(80代女性・高齢のため足腰が弱っている主婦)等である。津波にのみ込まれて、のちに助け出された人もいる。ぎりぎりになってしまった理由は、まだ大丈夫だと思っていた、安全だと思っていた、そして身体的な事情で逃げるができなかった等である。津波が岩手県で最初のテレビ中継があった宮古市に到達するのは吉里吉里の6分後である。同時刻、大津波警報が6mに変更された。助かった人はテレビ、ラジオ等によらず、独自の判断で高台に登って助かった

という事になる。

そして浸水域の中で人が集まっている所は、震災前に繰り返し安全だといわれていた場所である。ここで多くの犠牲者が出た。

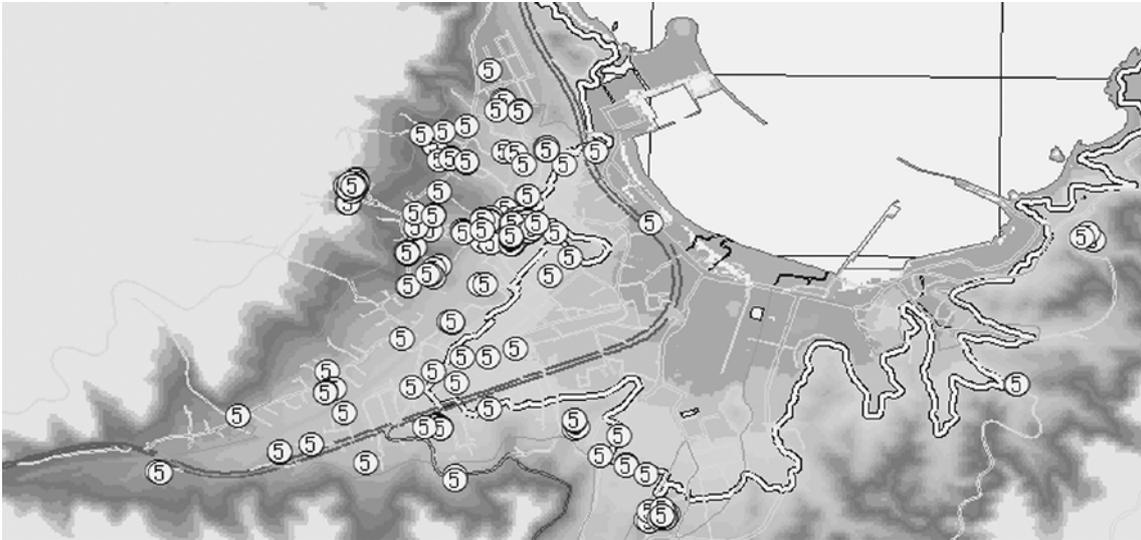


図5 津波が落ち着いたとき

図5、津波が落ち着いたときに浸水域にいる人は、救助のために向かった人と救助されている人である。ここで動いたのは、消防団とそのOBを中心にした地元の人たちであった。普段なら助けにくるはずの警察、消防署、自衛隊は津波で道がふさがれ、目の前の事象に手一杯でこうした小さな集落に助けに行くことができなかつたのである。3月の寒い日にずぶ濡れになるとあっという間に体力を奪われる。津波が引いたのが16時すぎ。日没は17時半。日が暮れてしまえば救助活動は難しくなると、2波、3波と押し寄せる津波をかいくぐっての救助が行われた。こうして助けだされた人がぎりぎり命をつなぐことができたのである。

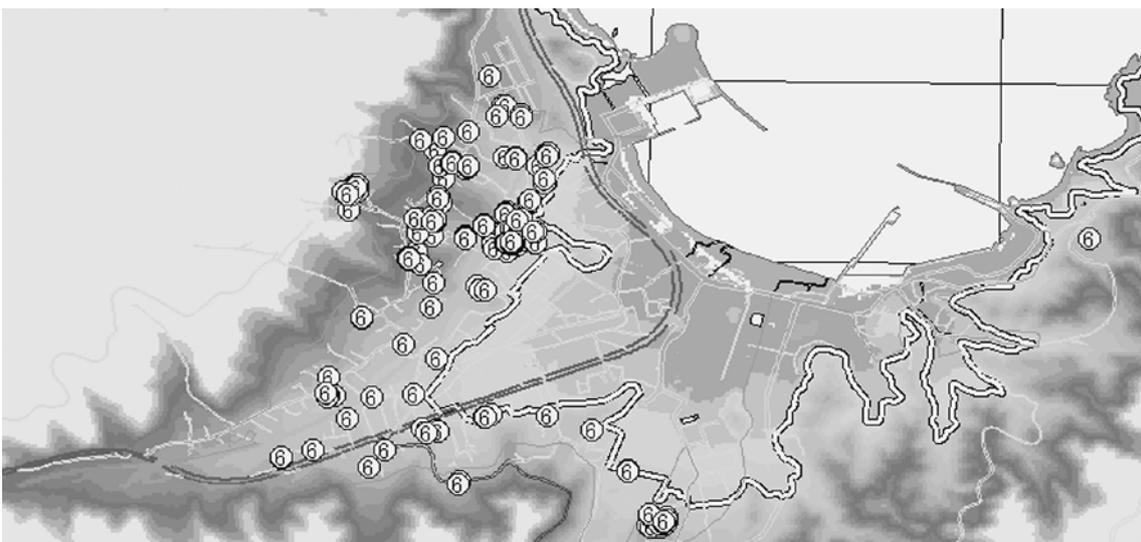


図6 この日の晩

図6、この日の晩に浸水域にいる人はいない。小学校に人が集まっているのが見える。ここに行政機能の中核である大槌町役場が全壊、炎上しているという連絡が入る。「しばらく助けはこないと腹

をくくった」(50代男性・自営)「行政を待っていたら、いつまでたっても復旧しない」(60代男性・漁業)と自発的に災害対策本部が立ち上げられる。

小学校、中学校、お寺、保育園に避難所が作られる。備蓄の食料に加えて、高台の各家庭から食料をかきあつめて炊き出しが行われる。「着替えに布団にストーブ。ありったけもっていった。何回も往復した」(40代女性・主婦)

停電し不安な気持ちで避難所に向かった女性は、暗い所にひしめき合っている人々に圧倒されたという。(80代女性・主婦) どこも一杯なため、親戚・友人宅に行ける人は行ってほしいと言われてい。中には一軒に十数名も集まった家もある。「眠る場所がなく、体育座りで身を寄せ合って朝を待った」(50代・主婦)

地域にたまたまいた医師と消防団で臨時の診療所が開設される。中学校の校庭には大きくHのマークを白線で描き、重傷者をヘリコプターで搬送した。動ける人と動ける重機を総動員して腰の高さまで押し寄せたがれきを片付けはじめる。山の向こうが火事で赤々と燃えている。

自衛隊が来たのはそれから4日後のことであった。こうしたインタビューから見えるのは、大災害が発生した場合、中枢から離れるほど公的な救助が来るのが遅くなるということ、それを補うように自主防災の力が発達していることである。

#### 4. 避難行動の動画化

次に①～⑥の避難行動の動画化を行った。動画化は、①～⑥の経路今度は線のデータとして地理情報システム (ArcGIS) に書き起こす。これを一分ごとの場所に計算し (人の流れプロジェクト、時空間内挿サービス)、動画化システム (MobMap2) に読み込ませる。

一分ごとの場所への変換と動画化システムは東京大学空間情報科学研究センター共同研究「津波襲来時の避難行動の可視化」により実施した。(この動画は、別途資料として提出する。)

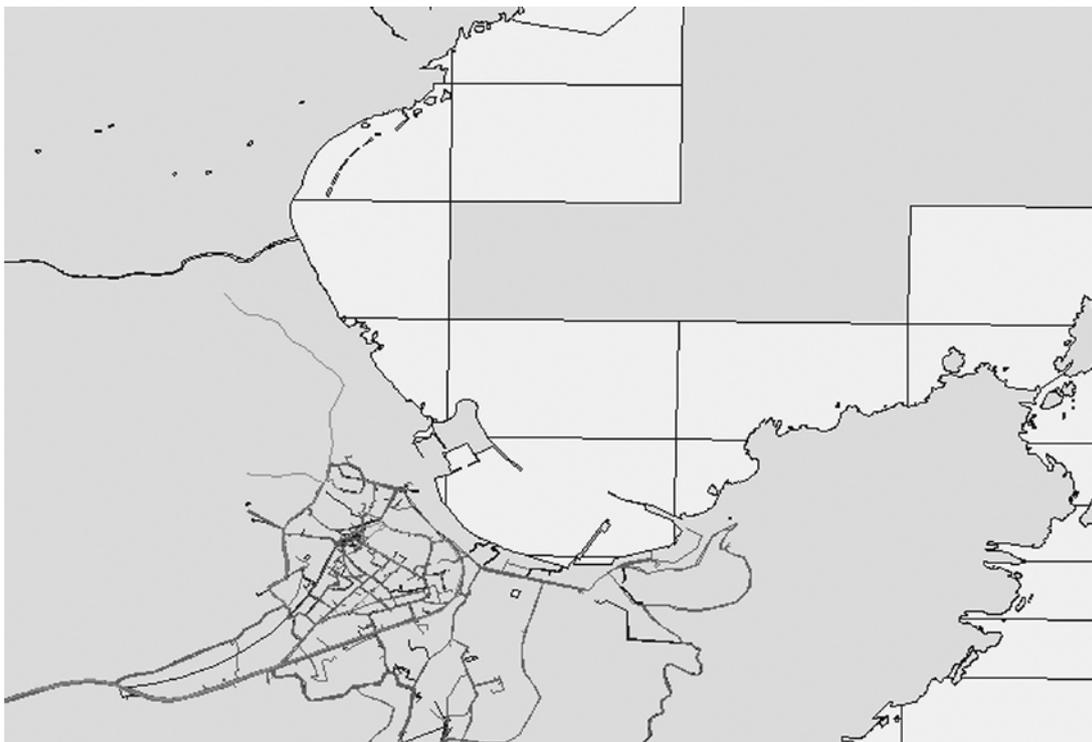


図7 避難経路をラインデータに書き起こし、重ねたもの。



図8 一分毎の位置を時空間内挿サービスにより計算し、MobMap2に読み込ませたもの。

## 5. 避難行動の分類

動画にした避難行動をパターン別に次の4つに分類した。A) ストレート避難型、B) 立ち寄り型、C) 動かない型、D) 帰ってきた型である。

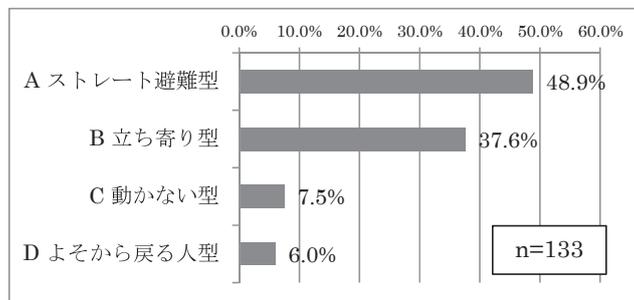


図9 避難行動の4類型

### A) まっすぐ逃げた「ストレート避難型」

地震発生時にいた場所からまっすぐに高台を目指した人たちである。48.9%となった。「母が高齢のため、避難に時間がかかると思いすぐに準備をして避難した」(30代男性・サラリーマン)「津波がくると思い、道にでて津波だーっ上がれーっと呼びながら上がった」(80代女性・主婦)。一旦は避難しないと判断したが、家族や友人が危険だと思って避難をよびかけ、あるいは車で一緒に避難をしたケースがある。呼びかけや働きかけにより避難行動をとれたケースである。

### B) 複数個所に寄りながら逃げた「立ち寄り型」

地震発生時にいた場所から、複数個所に寄り道をして、それから高台を目指した人たちである。37.6%となった。「自宅にいる母を迎えに行き、作業小屋の様子をみて、避難をした」(60代男性・漁業)「友人宅にいたが、貴重品をとり自宅へ。それから避難した」(40代女性・主婦)「消防団として水門を閉めてから高台へ避難した」(50代男性・自営) 危険と思っているが、家族を助けに、

地域のために、危険を冒している。後述の犠牲者調査と合わせてみるとこの人たちは死の危険と隣り合わせだったことがわかる。自主防災計画の策定の際には、普段の準備で、いかにこの人たちから危険を取り除くかが重要だと議論になった。

#### C) 逃げなかった「動かない型」

地震発生から主に自宅にいて逃げなかった人たちである。犠牲となった方の行動と近いと考えられる。「まさかここまで来ると思わなかった」(70代女性・主婦)「耳も目も悪いので津波が来たことに気が付かなかった」(80代女性・主婦)などと、ここは安全であるというバイアス、身体的なハンディキャップ、情報からの隔絶と避難行動をとる力がないために避難できなかったのである。

#### D) 隣町や安全な場所から帰ってきた「帰ってきた型」

地震発生時に吉里吉里から離れた場所において帰ってきた人たちである。「隣町で仕事をしていて、地震、津波だ!と思い必死で戻った。」(60代男性・自営)「隣町で買い物をしていて、地震で電車が止まり急いでタクシーに飛び乗った」(40代女性・主婦) 14時45分という午後の時間帯であったため、仕事や学校や買い物などさまざまな用事で外に出ていて、吉里吉里に戻ってきた人である。この人たちもあと数分帰るのが遅かったら犠牲となった可能性があった。

A～Dのアンケート結果を見ると、津波が来るという認識があった事（もしくは身近な人からもたらされた事）が避難行動へつながっていたと考えられる。2011年度に実施した仮設住宅調査では87.2%の人が避難への意識をもっていた。津波がくるぞ、避難しようという意識がもっとも命を救う要因だったのである。

避難した	87.8%
避難しなかった	12.2%

【大槌町仮設調査2011】: N = 1236 (無回答を除く)

## 6. 犠牲となった方について

こうした類まれな避難行動がみられた地域で、なぜこれほどの被害となってしまったのだろうか。

吉里吉里地区の死亡状況調査は大震災の結果亡くなった方全員を対象とし、関係者からの聞き取り調査を行い、被災状況の記録と死亡要因の分類を行ったものである。(表1) その結果、98名の犠牲者一人ひとりの被災状況について推定の被災状況記録を得ることができ、これをもとに死亡要因の分類を行った。被災した最終地点を地図上に示したのが図10である。

これらの調査を行う過程で、この地区で自主防災計画を策定しようという運動が立ち上がった。岩手大学はこの動きをサポートするために2013年1月から2014年7月まで2か月に一回のペースで津波や災害についての勉強会と被災時の状況や地域の現状の把握等をテーマにワークショップを開催した。これにより、個人がもつ断片的な情報を突き合せ、検証することができた。

表1 吉里吉里地区の犠牲者

ID	分類	状況	ID	分類	状況
1	低地自宅	自宅で待っていた。	51	低地自宅	自宅で、植木鉢の後片付け。
2	自宅以外	大槌で被災	52	低地自宅	自宅で被災
3	自宅以外	大槌で車の中で	53	その他	不明
4	低地自宅	自宅で被災	54	安全自宅	家にいた。片づけ？
5	低地移動中	宮古から帰る途中で被災	55	自宅以外	大槌町で被災
6	自宅以外	大槌で(住宅地図上不明)	56	安全自宅	安全とおもった自宅で被災
7	安全自宅	自宅で被災	57	低地自宅	不明。近所の人避難しろよに「はい」と返事
8	低地自宅	自宅で被災	58	安全避難中	安全と思った避難先で被災
9	安全避難中	避難中	59	安全避難中	犬の散歩のあと自宅に戻って被災
10	安全避難中	避難中	60	安全自宅	不明
11	安全避難中	避難中	61	その他	関連死
12	安全避難中	避難中	62	自宅以外	安全とおもった仕事場で
13	低地自宅	自宅から引き波で海へ	63	安全自宅	自宅で被災。
14	その他	鵜住居	64	低地自宅	安全と思った親せき宅で被災。
15	低地自宅	自宅で被災	65	低地自宅	自宅で被災
16	低地自宅	自宅で被災	66	低地自宅	自宅で被災
17	安全自宅	不明。自宅で逃げず。	67	安全自宅	安全とおもった自宅で被災
19	低地自宅	知的障害の子が心配で自宅にいた	68	低地移動中	送迎バスで被災。
20	低地自宅	自宅で被災	69	自宅以外	津波を見に行き下った
21	低地移動中	イカ釣りの船が心配で海へ向かう車で被災	70	安全避難中	被災した商店から自宅へ車で帰る途中。
22	低地移動中	漁船を確認しにいった	71	低地自宅	自宅で被災
23	低地自宅	避難したが自宅に戻った	72	安全自宅	自宅で被災。
24	低地移動中	不明	73	低地自宅	自宅で被災
25	自宅以外	大槌で被災。	74	低地自宅	自宅で被災
26	自宅以外	海岸近くの作業小屋で被災	75	低地自宅	自宅で被災
27	その他	不明	76	安全自宅	見つからない。自宅にいた。
28	低地自宅	車を取りにいった。	77	安全自宅	孫見にきた。被災なしのところから降りてきた。
29	低地自宅	自宅で被災	78	安全自宅	夜勤で自宅へ車取りに行った。不明
30	低地自宅	自宅で被災	79	安全自宅	自宅で被災。
31	安全自宅	自宅で被災	80	低地自宅	自宅で被災。糖尿病で足を切断。
32	安全自宅	自宅で被災	81	低地自宅	自宅で被災。看病、おいていけない。
33	安全自宅	自宅で被災	81	自宅以外	大槌町で被災
34	低地自宅	自宅で被災	82	低地自宅	自宅で被災。
35	低地自宅	息子を心配して自宅へ	84	安全自宅	自宅で被災。
36	安全自宅	自宅で被災	85	安全自宅	自宅で被災。
37	安全自宅	自宅で被災	86	安全自宅	自宅で被災。
38	安全自宅	自宅で。漁民センターまで流される。	87	低地自宅	自宅で被災
39	低地自宅	不明	88	安全自宅	安全とおもった自宅で被災
40	低地自宅	不明	90	低地自宅	自宅で被災
41	低地自宅	不明	91	低地自宅	自宅で被災
42	低地自宅	不明	92	自宅以外	大槌で被災
43	安全自宅	自宅で被災。避難後自宅が心配で下がった。	93	安全避難先	親戚宅へ避難
44	安全自宅	避難後自宅が心配で下がった。	94	低地自宅	自宅で被災
45	低地自宅	自宅で被災	95	安全避難中	自宅から車で逃げようとして
46	低地自宅	自宅で被災	96	安全避難中	自宅から車で逃げようとしていた
47	低地自宅	自宅で被災	97	低地自宅	自宅から車で逃げようとして。
48	低地自宅	自宅で被災	98	低地自宅	釜石市のパチンコ店から自宅へ戻って被災。
49	その他	不明			
50	低地自宅	自宅で、植木鉢の後片付け。見つかる			

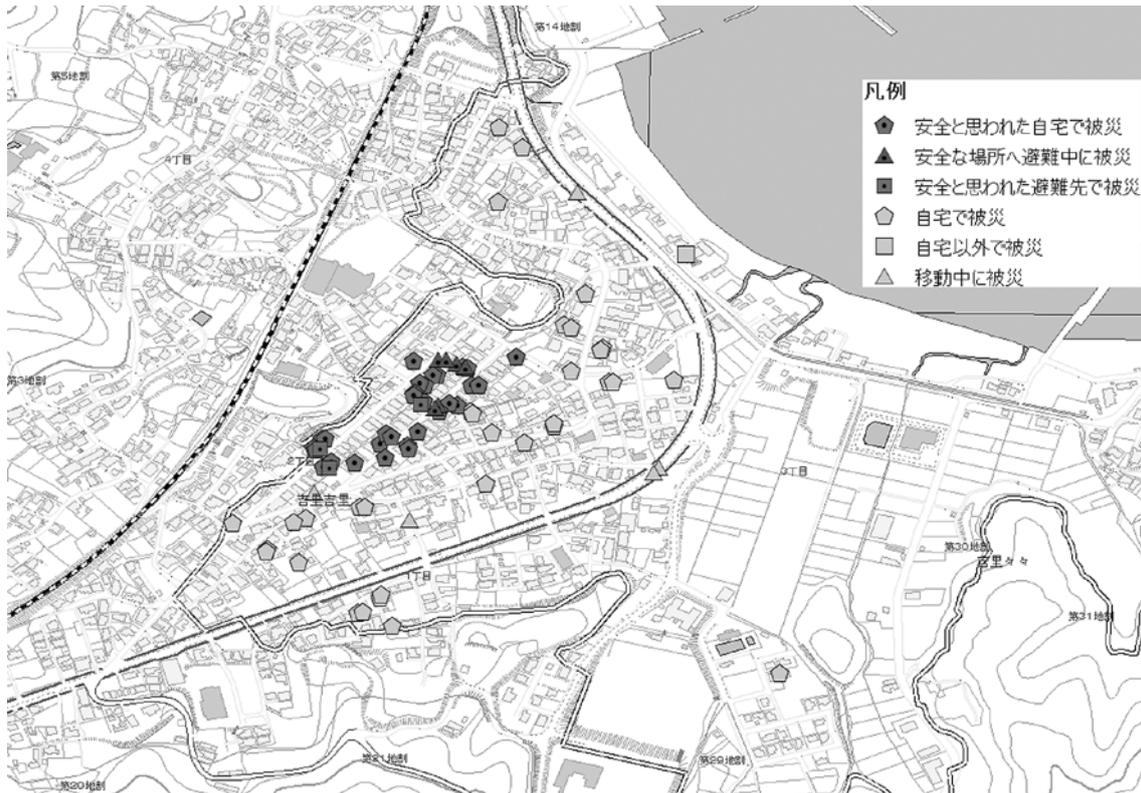


図10 吉里吉里地区被災調査

図10は被災状況を地図上に表現したものである。犠牲者が集まっている場所がすぐ目につく。ここは昭和8年の昭和三陸津波の後、かつて海沿いに住んでいた人たちが自ら土盛りをして集団移転をはたした場所である。なぜここ犠牲者が集まったのだろうか。

中黒の図形で表したのは、自宅および避難先が安全だと思ってそれらの場所に避難しようとして犠牲になった方である。想定を1.5m超えた地区に集中している。

同様に中黒なしの図形で表したのは低い場所で犠牲になった方である。自分は大丈夫だと思い、避難に介護が必要な家族を見捨てられなかった、あるいは漁船や仕事道具のために海に向かった等の事情を抱えた方であった。

犠牲となった方を生存者と同様に動画化し、分類したものが次のグラフである。

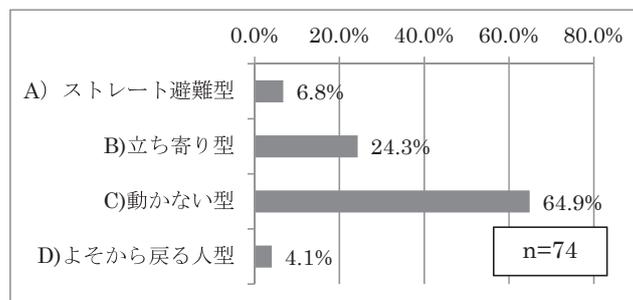


図11 犠牲となった方の4類型

A) ストレート避難型

逃げようとしたその時に被災した方である。高齢の家族がいて避難の準備に手間取った、足がわるく逃げきれなかった方、そして安全だと思った高台に津波が押し寄せ亡くなった方がたである。最も安全な行動の中にも犠牲者がでているのである。

B) 立ち寄り型

家族を迎えに行き、貴重品をとりについて、船を見に行き被災した方がたである。立ち寄り型の行動は生存者と犠牲者の差がないように見える。何らかの事情があり、浸水域を走り回るその時にたまたま津波に遭遇したか否かの差しかない。

C) 動かない型

犠牲となった方のうち、64.9%が自宅から動かずそのまま犠牲となっている。地震で割れたガラスの片づけをしていた、ここは大丈夫だから落ち着けと言われたといった、安全であるという思い込みに加えて、寝たきりだったり難病を抱えている等自力での避難が困難である、アルツハイマーや知的障がいを抱えて危険を認知できない、そして避難が困難な家族をおいて避難できないなどの事情が重なっている。

D) 帰ってきた型

隣町で働いていて、買い物をしていて、帰る途中で犠牲となった方である。この方がたも生存者と犠牲者の違いはないように見える。たまたま通った道が運悪く津波に遭遇してしまったのである。

調査を進めていくうちに、犠牲となった方のうち、もっとも多かった「ここが安全だと思った」その要因として、事前の避難訓練とハザードマップにより「ここが安全だ」と繰り返し語られた事があるのではという話がでてきた。

そこで、このことを検証するために、岩手県総合防災室が平成16年に作成した、「平成16年度 岩手県地震・津波シミュレーション及び被害想定調査」で作成された被災前のハザードマップ（図12）と、今回、我々が作成した吉里吉里地区犠牲者図（図10）を重ねて検証を行った。

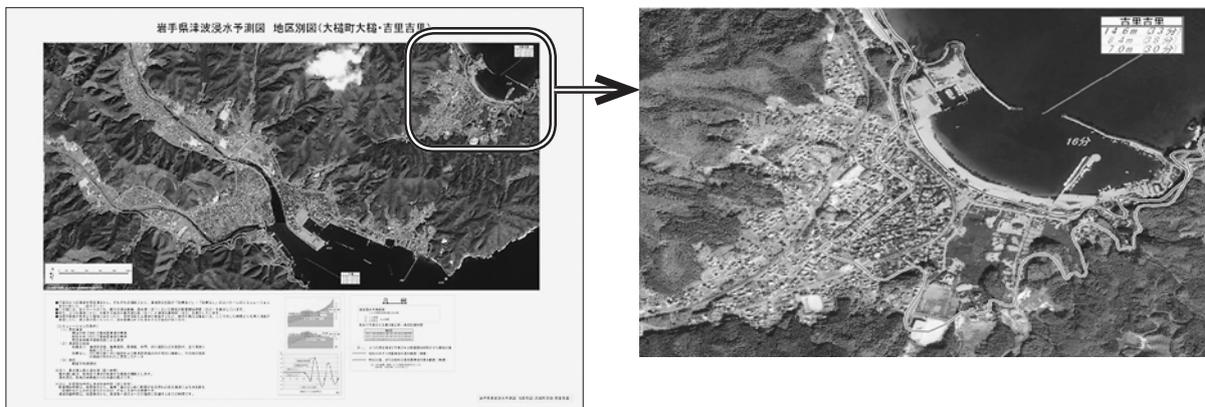


図12 平成16年度作成のハザードマップ。  
左は大槌町全域。右は吉里吉里地区を拡大したもの。

平成16年度に作成されたハザードマップは次の3つの津波を想定したシミュレーションを元に行っている。

- ①明治29年（1896年）三陸地震津波の再来
- ②昭和8年（1933）三陸地震津波の再来
- ③想定宮城県沖連動地震による津波

これにA)津波防災施設がすべて機能した場合、B)津波防災施設のうち河口を除く河川堤防、津波防波堤のみが有効に機能した場合、この6つの組み合わせの津波が満潮時に発生したという想定で行われた。この結果、最大14.6mの津波が地震発生後33分で到達、標高14mの高台に対して最大1mの浸水があるという想定がつけられた。この想定について、特に、昭和8年の津波被害による高台移転地は安全であるような線引きがなされている点、津波防災施設が全損する事態は想定されていない点の2点に注目したい。

予想はほぼ正確であった。2011年3月11日14時45分に発生した地震による津波は、およそ30分で吉里吉里地区に到達、津波防災施設のすべてが破壊され、津波浸水高は16.1mに達した。予測の1.5mの高さであった。

このハザードマップを見て、避難訓練を行い、その結果、最大の予想よりずっと低い「3mの津波が来る」という予報を聞き、90%の方は、念のために高い所に上がろうと考えた。

しかし犠牲となった方のうち64.9%は「だったら安全だ」と考え逃げなかったのである。ハザードマップは減災の力になったが、一方で正常性バイアスを加速させているのである。

今回は小潮の時期であり、干潮が13:10であったことが犠牲者を抑えることになった。もし、大潮の時期の満潮であったら津波はさらに1m高く、安全だと思って自宅をにいてぎりぎり助かった方を加えると、犠牲者は120名を超えた可能性もあった。



図13 ハザードマップと被災調査を重ねたもの

死亡状況とハザードマップ、2つの図を重ねてみるとその傾向が明確になる（図13）。津波到達直前にかんする証言【浸水した高台在住、70代】によると、高台の地区の人たちは、地震後いったん家の外に出たのち、「さらに高台に避難した人」と、「自分たちは安全だと考え自宅に帰った人」で運命が分かれた。同地区の証言【60代男性・消防団員A】によると「2階から手を振って大丈夫だとア

ピールした人もいた。」という。1m以下の津波など、どうということもないという思い込みがあったと考えられる。津波到達1分前に釜石市から自宅へ向かう途中たまたまこの地区を通りがかった人の証言【60代男性・釜石に勤務する会社員】によると、「人っ子ひとりおらず静かであった」という。

一方で、ハザードマップで想定された浸水範囲内側の住民は比較的早く避難し無事だった人が多かった。低地の保育園ではいち早く避難するよう日頃から訓練を怠らなかったという。そのぶん、この地区では身体的・精神的事情を抱えた人とその家族の犠牲が目立った。現在把握できている範囲で低地の犠牲者37名中6名が避難をあきらめた人たちである。

そのうえで注目したいのが、ハザードマップで最大1mの浸水があると想定されたエリアである。ここは昭和8年の昭和三陸津波の後、かつて海沿いに住んでいた人たちが自ら土盛りをして集団移転を果たしていた。その様子は三陸大津波による集団移転を分析した山口弥一郎『津波と村』でも賞賛されていた。言わば、大きな犠牲と労力を払ってようやく手に入れた高台であった。「そこが危険であるとは思いたくなかった」と同地区の証言【60代男性・消防団員B】は語った。

シミュレーションで想定されていたのも最大1mの浸水であった。たしかにシミュレーションが正しく行われたかという議論も残るが、1mの浸水であれば2階に上がれば大丈夫だと思ったという証言もあった。自主防災策定会議の際に、防災計画を作れば計画通りに津波が来ると思い込んでしまった人が少なからずいた事が話し合われた。ここでは「津波は思ったようには来ないもの」としっかり伝えることが必要だという結論となった。

## 7. 避難行動の促進要因・阻害要因

吉里吉里地区は津波の常襲地域であるが、日頃の準備、訓練や言い伝えにより多くの人々が避難し助かっている。今回の津波では防潮堤等の津波防災施設は全壊している。地震発生時、約1,000人が浸水域にいた。言うならば「つなみてんでんこ」に代表される言い伝え、実践的な避難訓練、祭り、それらの根底にある三陸独自の価値観で構成された「防災文化」により900名が助かったのである。これに対して、防潮堤が数分間持ちこたえた点を重視し、間一髪で助かった人はこの数分で助かったとして、もっと強力な防潮堤がほしいという議論もある。これについては一概に答えが出ない。ただし、堤防があるから、苦勞して作った高台に住んでいるから大丈夫だというのは「正常性バイアス」の一種とも考えられる。今回の調査を踏まえれば、このバイアスが脆弱性となり犠牲者を増やした側面も否定できない。

さらに注目すべきことに、吉里吉里地区にはもう一つの脆弱性があったことである。それは一定のカテゴリの人びとの避難が難しかった点である。図5は犠牲者の年齢別構成を示している。ここからわかるように吉里吉里地区は高齢者の犠牲者の割合が高い。この地域の高齢化が進んでいることを考慮してもそれを上回る割合である。

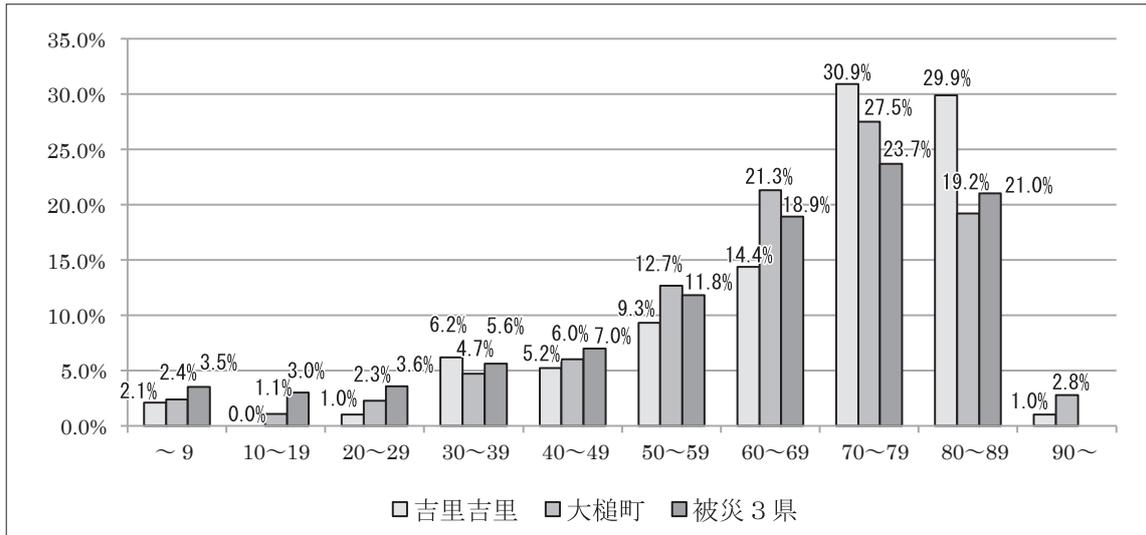


図14 被災3県・大槌町・吉里吉里地区における被災死者の年齢別構成 (3)

ただしこれは、自力で避難できない高齢者を「てんでんこ」で置き去りにしたということではない。このことはむしろ吉里吉里地区の「防災文化」をめぐるアイロニーを示している。つまり、この地区の避難行動に対する意識が高かったため、避難がより容易な若年層における犠牲者が他地区よりも抑えられていたと考えられるのである。さらに言えば、自力で避難することの困難な人たちへの対応はこれほど避難意識の高い地域でも難しかったという点に留意する必要がある。

## 8. 自主防災計画策定プロセスで明らかになった、避難弱者の対応の難しさ

岩手大学は2013年1月から2014年7月まで吉里吉里地区の自主防災計画策定の支援に関わった。全7回の防災会議ではこの地域から災害による死者を出さないようにしたいと、住民たちの発言は尽きなかった。その中で最後まで結論が出なかったのが自力で避難できない人をどう助けるかという点であった。自分の命をまず守り、次に近隣の人を助けるという案が提示されたが、やはり、目の前で助けを求められたら見殺しにできるか、助けに飛び込むかはその時にならないとわからない。最終的にはそのガイドラインを予め決めることはできないという結論に至った。

しかし将来また津波に襲われても、ここで熟慮したことは無意味ではないと思われる。実際に、そのような限界的な選択が迫られる状況に陥らないように、次の災害までにできるだけ避難の手段や体制や道具を整備しようという結論が得られた。



写真1～4 吉里吉里地区自主防災会議の様子

以上をまとめると、吉里吉里地区の詳細な被災状況を踏まえれば、より注意すべき地域の脆弱性は、自分たちで作上げた高台だから安全であるという「正常性バイアス」と、自力で避難することの困難な人たちへの対応の難しさにあった。これらはこの地区ばかりでなく、どの地域でも潜在的課題である。

付言すれば、この課題が明確になった背景として、吉里吉里地区の人たちが独自の「防災文化」による避難行動をとった点を忘れてはならない。つまり「防災文化」の効果を踏まえてもなお2つの課題が残るのである。これら複合的な課題を、この地区の人たちだけでなく、災害が懸念される多くの地域でどう解決していくかを見定めてゆく必要がある。

それでも吉里吉里に住みたいという愛着はいったいどこからやってくるのだろうか。

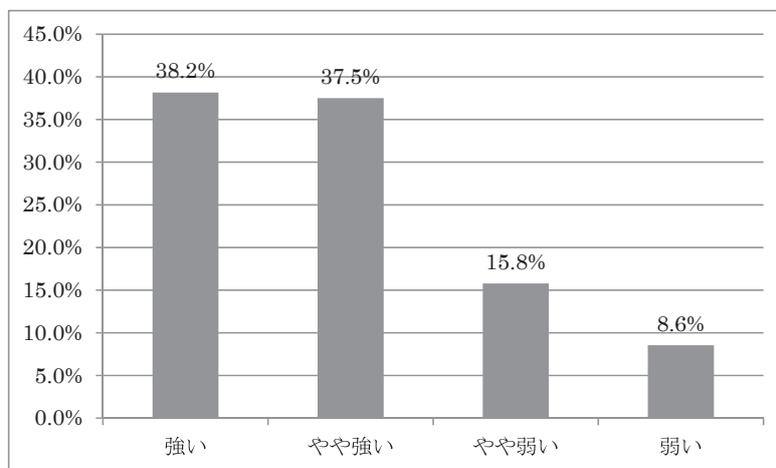


図15 大槌町への愛着 (2013年度大槌町仮設住宅調査より吉里吉里地区の集計)

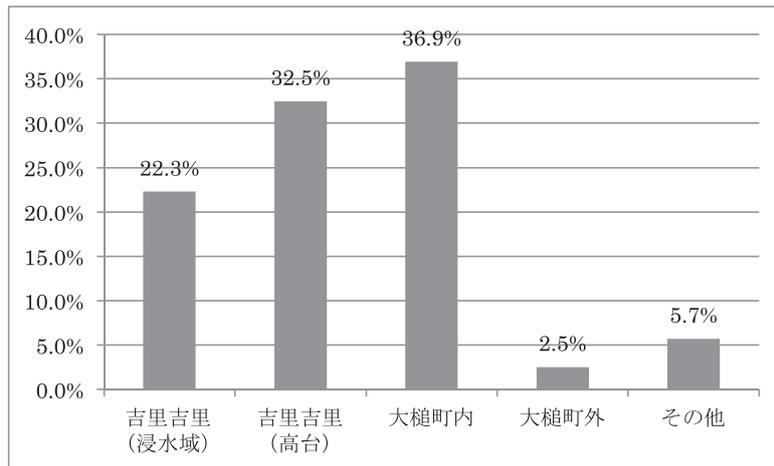


図16 今後住みたい場所 (2013年度大槌町仮設住宅調査より吉里吉里地区の集計)

2011年、最初に三陸沿岸にやってきたとき、人々の親切さ、人懐っこさにおどろいた。冷たく排他的で傷ついている、という前評判は覆された。過疎地で少子化が進み、被災により消滅してしまうかもしれないと聞いていたが、東京よりずっと子供が走り回っていると思った。格差と貧困が進んでいると聞いたが、手間賃で魚をどっさりもらい、近所に配るという文化は豊かだと思った。調査をつうじてシャイな学生が自信をもって人と関わられるようになっていった。

この地区にも小中学校を統廃合しようという案が出たが、地域の子どもたちを育てる拠点として死守された。そして、震災以前の自主防災は形骸化していたというが、形式以上に自主防災が機能し、多くの人々の命を救っていた。この震災をのりこえた経験は人々の文化と経験に何を残したのだろうか。この地区が持続し発展していくとしたら、それは「地方創生」の鍵になるのではと考えている。

## 参考文献

- 山口弥一郎, 1943, 『津波と村』, 三弥井書店
- BIBB LATANE, JOHON M.DARLEY, 1968, 『GROUP INHIBITION OF BYSTANDER INTERVENTION. IN EMERGENCIES』, Journal of Personality and Social Psychology, 1968, vol: 10, No.3, 215-221
- 広瀬弘忠, 2004, 『人はなぜ逃げ遅れるのか』, 集英社
- Benjamin Wisner, 2004, 『At Risk: Natural Hazards, People's Vulnerability and Disasters』, Routledge
- レベッカ・ソルニット, 2010, 『災害ユートピア』, 亜紀書房
- 山下祐介, 2013, 『東北発の震災論 ―周辺から広域システムを考える』, ちくま新書
- 山下祐介, 2015, 『地方消滅の罫 ―「増田レポート」と人口減少社会の正体』, ちくま新書
- 麥倉哲, 梶原昌五, 飯坂正弘, 高松洋子, 和田風人, 2013, 『東日本大震災犠牲者の被災要因からみた地域防災の課題 ―大槌町吉里吉里地区自主防災検討のための死亡状況調査から』, 岩手大学麦倉研究室
- 麥倉哲, 梶原昌五, 高松洋子, 和田風人, 新毛真由美, 大久保名美, 佐藤記一, 2013, 『大槌町仮設住宅2013年調査概要 仮設住宅の暮らしとコミュニティの現状 ―岩手県大槌町仮設住宅調査から』, 岩手大学麦倉研究室
- 麥倉哲, 梶原昌五, 高松洋子, 2013, 『Arc-gisを用いた津波避難行動の検証 ―岩手県大槌町吉里吉里地区を対象として』, 岩手大学麦倉研究室
- 吉里吉里地区自主防災計画策定検討会, 2014, 『大槌町吉里吉里地区自主防災計画(案)～津波からの避難について～』, 吉里吉里地区自主防災計画策定検討会
- 神原康介, 窪田亜矢, 黒瀬武史 [他], 2014, 『東日本大震災時における高齢者の緊急避難行動の実態と集落環境による影響: リアス式海岸沿い集落・赤浜のケーススタディ』, 日本建築学会計画系論文集 79(701), 1593-1602, 2014-07
- 麥倉哲, 梶原昌五, 高松洋子, 2014, 『地理空間情報を用いた避難行動の類型化に関する研究』, 岩手大学麦倉研究室
- 麥倉哲, 梶原昌五, 高松洋子, 2014, 『地図情報システムを用いた津波避難行動の類型化―岩手県大槌町吉里吉里地区を対象として―』, 岩手大学麦倉研究室
- 麥倉哲, 梶原昌五, 高松洋子, 2014, 『大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究 ―岩手県大槌町「生きた証プロジェクト」を事例として―』, 岩手大学麦倉研究室